



特
15
6588
1



類林文集上

何げかの



探幽の能事その世子子こそまねて或る
女院の妙所くわく曙乃気もをききて奉
らめよの何とわきておのひりけさ
風情をいりて業よはらりし侍るへ子や波
野度無し人舟自横とささしを色乃
待まむあふ船は海をのせて及芽し
きり亦一竹のそよひの昼乃歌よその
心をほつて金殿乃よ白雲をんかひり
せりもまんあふの魚の奇淋なり
とる情もは我國人の名折なれと

紗布堂

54-8582

含秀亭花中吟 五句

冠里

落花 日よの約十日よおを梅買
満花 お脰乃鳥も日よれをの時
落花 はあくの蟻とあましく梅塚
山中閑寂人跡稀ナリ

音羽うら喜あるものや梅の蒂タ

王維昼山水之賦 遠人无目 亦曰丈山尺樹

寸馬豆人とあゆを雨中の花

晋シ

此面とむるぬんや家の豆

三浦

山庄 高き樹の雪ふ昼をくく鹿が

貝のそりしをむき侍るを

あさり貝をむきの劔うらさひぬ
蛸むきやあさりハハらぬ水漬
着沼や塩漬よあするあさ貝
鉄槌くわれく 羸螺ニのかくさ
子安貝二見乃くを産婦か
色あさりやかつきあけき水の粟

無腸公子

芦の穂や蟹をやしめておもせん
あかさし一陽家いとけ表のうみ
右年た子の興をねて

浮舟のほくし中へかき出甲

海島曲浦長汀の吟

公羽

あつと山崎浦りけそ夕涼み
汐こゝや露脛ぬれて海涼し
何れ海や依はよあつと天川
子指のまや分入るい何りそ海
石のやふり

蛸壺やまろれそ夢を交れ月

此はういもいりりやうい

うつあを角あり分を次へる

五日十日雷雨ス永代島の小室よ

やうりて鳴るを鳴り

音子

鳴るより神鳴られて 鯨の蓋

ちかちか

坂翁のかくぢやそ及ん侍るなり

尾花沢まで清風を存せうれは富か

ものゝ志いやりし都ももおと海に

てはけうは旅の情をも志りしれを長

途のしりりやあくもそれ侍る

涼さを家宿りしてぬおる也 翁

奉白集くめて吾書よいけりるるの記

五日小田原より小所の宿に泊るゆきと王

をれの小瓶よ泊すに入る粽めくも乃

所前あそとさしりあるの男もたわん

けふいりてさしせちも一盃けしめられ

まは朱雀の柳とて何れも飛らぬの柳とてふ
なる折らぬあまの笠りりてはゆいゆけい

そらひらくこい西の売あぢいより 音子

これこそカサヨリありあてゝゝる也亦

心とあぢいみし人のあぢいもや

おとくもあり世志とておらん

紙魚と成られし灯籠の墨字が冠里

十二夜

紙雜のうらみ手姿小砵月 同

南橋月下子寒き衣をうらとあせそ

夢かんのきひちるはあぢいのかさす

らんさといあてんて笑ひてゝあるり
その衣をさのり月とそそ

赤化乃心

河野松後老人 宗弟列々 茶名 一物之用の器

燗もて何れも則長崎翁のめてあはる

記何れもあはるはあぢいのかさす

そらひらくこい西の売あぢいより

何れもあはるはあぢいのかさす

もよありして風月の窓灯るる扉を

あぢいのかさすはあぢいのかさす

あぢいのかさすはあぢいのかさす

あぢいのかさすはあぢいのかさす

あぢいのかさすはあぢいのかさす

あぢいのかさすはあぢいのかさす

あぢいのかさすはあぢいのかさす

繁^{ホナ}しとありて誰とあく後をわびば
身は志あやうやうに物主乃涼
味りある心ありてをうらむ居る
此の糸をよめて此執おしけれり
花よりもれ夢より病をおす
水より何れまじし扇を忘る戸岳の雨
を心せりて極面のこころ風情
かいたる戸雑俎の條に尾を曳きん
龜のけしきり水声玉あるはより
此一ふ又夏を流りて老人の茗話忘れ
りて月より入時を満ちりて
飛ちりよほとの窓あつた花をせぬ

かこさやほし今ハ郭公すがりてある
久し取出ぬあつてのまじりて
雨席を犯はぬあつていけりて
匂つた糸をゆきゆりさねの糸與今
ニ昔よりある
凡の糸を糸いりたる志を州
あつたや弦をうらむ長巴の上言水
世もな准あやまつて凡持糸音子
幻住庵下こもれる
あつたのもおのりも片つた凡の花翁
はあつたもこれきり
たぬも持世周の凡の行つん 秋

下巻の控川子あそぶる時

風守やうららの籟多しより 音子

紅の靈泉よひりて

岩飛の味なきうれる凡一ツ 滝亭

此の皮水も端のう流れたり 音子

唯神の凡まつくねりて無か 六町

牧方や凡といふ事ゝあつて 推車

西風の蛮國の種りて中華の賞歌うす

かゝるうと冊を束のたやりのものめでしに

和音所もようあけつるうらむを女房達の

さうもせらるゝとあつても影のうらむ

侍らむ

中めひりて

西の信仰の中乃又うらむと心とあ

すねあひりて名なき人々をよめ

なして執事のうらむのうらむのうらむ

山家集せんすおとあそぶるはあはれ

泪の草と名付る定家への業るう有

六丁の末の静居士とあつてもやこの

乱をさけて住吉のなやりに浄休を

とあはれたる若乃月あそぶるはあはれ

らんよはれありし其はあひのうらむ

虫門國とあつる神の社司加田の重貞と

いづるものはあはれまはれかへりけるうけ

かゝ陸奥よりありぬをわのし作りしう
み来きしきさしを重貞おあつらぬく
思ひくくせる名日のあつきのまき
住吉のゆき花とよきせしあしして
まあくまわりきりおのねくせを
まろはすふまのまの日記
重貞此非流と恐れをりてとく墨吉は
治ての静居士は法樂の和号をすくわ
りけるふありの心さしにりりて十首和歌
奉納を幣のよきをきくはくものこりり
是未の代は連禰ともふ夢想用の念を具
りせしこの例とよ

小石の窓

いふ栖ふ小陸は芦荻きけくおいて菰阿あ
ちり地ある草場町とりのあつたて
昔ハ海邊をりしをといふ家作り
山王権院のゆ旅村と出くあ葉ゆをけ
とらあふ堂のりこりりてはのうは
りけるらんを空地にありきあて地あ
深きあり人かけききききの子はま
のびあふこ葉木をつすりる雨ね
つげても虫の声はあがり大いなる
くくちる小待よりあふあふり
こらたりし窓あふふふあふ

く寝しつを其つらわりの竹の簀子
み這出さぬ螢をかきよるもてし家娘の
四つたうりぬるあふあくぬとてしつ
とす何物やもしくしくさるをりぬもの
りてちと母をすうとりりあつ隅る
あは灯の袋をりけて舟と名づく
石灯籠改めあきしりうあね景
垣根ゆいひらる古菰又夕貝のもよりん
り執りて南にかけをよなひふあね
を東にひらりてちうぶあきん男何
何おこの勤りすこやうはつて鯨口
あきく秋の声自れりまわらう鯨負

掘りつるは男を四五人入すりてま
川つらゆり陸片々のつたひ赤井
かまんとて溝堀りあや例のりり
五良のハ栗栗のねぬくりあんをま
乃細くちあすすあやあんとらんれをむ
新既菊や宿る新せくあてあるを
作らるす下子風景を殺せる家築造
るうとあむたをちも堀さひあはり
古くぬせとせやうりくあせて細代
やうふそのけり文音のしあおり
秋のけをりてあはまのりあ
あはくとあはりのあはぬ

わらわすのりて日をくくひん 道因
日やくしつふまをねの男の株車
らつ論もてあがりてくおせのこりつ志
らひらり文七とりよ者もあひこく所
成をさくやうりりて虫のねもこく小舟の
ふもあうりもあひこく世のめ
張雨をれて邵生う凡諸葛う粟畠
ああしくすといへともそそのまをく
ありりれた小殿の志をくを鼻ひるよ
いひそくせ元結こく考ひるハ日くし
はまのくして又あひの心もく山塊の
思り来ぬあよこそ五百城くらるまあ

くぼくと巻やりの車のかくあやハ百
乃尾のりれあ志より秋なる蛇蜂あとの
羽音のりかよあひくく松尾の
いこめあ志あひもあは唐人風巾
そよ吼くまををりうかすひし
あのかく乃形勢ハ農まあをねを破れ
めれる笠蓮よりくかけ袖をああ
くつをいて窓のほれ乃舟りあ
より夜こはやすあそあ雨の目も
むちのく車のもあそとああ
まををあひくく
時鳥あやうりあ氷くるる 宗因

又七のよきあるれをのつらり角

元結のゆるるるてうほし出のあ

大絃ハれりすいといはある雁

西北子なるる塗壺の間一株の柳あり

ん五とせりい九るるは雨のそ枝を

きれらふ雪おもなりこそふ病長節

うあづけともしあしり時よつけけ

蝸牛 豆りやそりり柳りる 同

正月つとちりるあ

山吹を柳り系の原をか 日

こりつとそりるあ

春雨やひりるあ子ハ枯けし 日

萩のうらみ

河東子楓子 石原 河南子曉松 本所 すありあ

此西子あれを鼎のよとく交ハせりをのく

萩をうらみし紫白けあな秋の情とこ

まかへし月あのを枝を前栽はしりて一口

茄子のあみ葉乃ほふはてしり楓子あ

まをそよしたをのりあをせは咲こりれ

あもこりは盃乃かたしめは かつ

寐しる花書あてと長治桃ハとこりう手

ひりれあしり 碎 海のんや

あしりしを誰の内後そ萩の鹿

曉雲ハ野亭持りしくかあへて志ハ盃

あはれは自苦困のれ情他は敗荷を憐
むみ橋より睡夢をやすんじり萩のふ
そらしく子輪やりして白のをこぼすす
あ霜のふらふら小まは心を尽してあやあや
あまは火をもてあす犬猫のまらう
りけてこそ宮城野をこぼしこぼりか何の
里外あらしすりすもふく袖の書すりら
と新れるや

獅子伶の胸からすか庭のはき

晉子

小崎のすれをようせぬるハもとあらし
春刈のこいしる去冬の古枝よ嘆あるり
何れは本あらし揺を此里こ

もろは雨庭の笹垣越かすあは無掃
なるも捲りかすやこの人あはせ
をやとあらし小萩子志ほる衣をてつ
り洗濁そのり拍木よりちりけあは
鈴獨鉦のり子出のねよあり流るも
他人のこつてうごり畠の玄白をまり
つく園の妙丹の霜あさつてを付も
世あそむげらる亭坊あつて

萩はるんすい分えや甘茶

晉子

菴主は文章みめて玄白妙丹とら
似合しや戒名をとり父母は名つけてど
いへり顔氣時とあは

河東の萩遊記

萩のこれみ鳴らんけいこ 笛 曉松
萩のしとくおとよの卒都の溪 柳子
白萩やあゆみあるいささ井よ 雪吟
萩子来て流麻のへう 五本松 秋を
波著ちるや水子這子乃玉 祥 琴風
箱戸梅や千枝よりくま萩のふ 志賀
大名を位せそんをや萩の仇 寒玉
そとくふ立よる 袖やおほる 除 日長

自画讃

るあもところさぬ萩のうねりか 翁
百里壁の萩のりうれ 櫃のく人 秋帆

物 袖よこれさかれそま萩原 宜夏
乱る小萩の車や茶碗書 大町
東小日光海原のやせしる菊りり如こみ垣
根留たしちる島乃多り 咲みんれてこり
よりま萩遊記そのすあももあすまはよ
四しののしり真を拜と奉侍をたしな
子 洞子いささりあり 前並びしく笠持
二人中童子いさうけみめされるおんたおの
侍副侍りそくもさすに次上童子四人
馬上曲篠 けり後師四人の坊官も力
持てる侍たのり列まあてはあまのん昔
と人足とも仕下あまのりりる寄りけあけ

走りぬくもさうさうなまのこまきまを
さうさうさうさうさうさうさうさうさう
おのれせしや

菖蒲のれ菩薩よてんり上りてん
花よりけい世越の菖蒲乃ありける弁外
能因の禪はさくや志なき菖蒲竹意
る上り一字引ぬやをそのる角叶
む菖蒲よ女むすい准もとい昌貢
菖蒲の賤く奇きよよりぬるか常役
菖蒲よて尾ぶ芦毛乃いけき入松

いあつらの灯

刈田よなく小川の菖蒲の膝を容れよすけ
なるを科頭箕踞長松下とらちうめ
かるそのさうさうさうさうさうさう
いさめ時蓋さうさうさうさうさう
三つの窓もさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさう
あとのけいさうさうさうさうさう
の虹乃山の端よちりさうさうさう
かうさうに氣を伸む一星の烟をさう
穴目より小斗を伸むさうさうさう
中の銀河さうさうさうさうさう

深夜をかくさむる敷かきくもつてふれ家
破りりく目子も松風舟のかうくいと押来
は色納屋の魚よふ曉まで子紅圍の松波
白屋のひとりぬき着て楓橋のおりひを
のび萩浦のうちをそをそあるをちちし
清夜のゆをゆつむる子秋興ハアリ

名月下佛堂の鼓く目そそく 晋子

水汲のありつき起やすおの觸

申れろ子ぬき貴人小舟子ぬ

人音や月元と何のほ伏え州

酒りいよゆりぬぬの居ひん

塙塙や柱を祓ぢいり一時ある

滋業城の虫洞子あつても表の色

子子あつてハ描もりまふ子色言ふ

夜もひくくもりあつてのうくいさうおれり

比めて盗汗をばまに子の金州ノ満堂の

くさるものさばぢもくくつり安懸...

此油燈ふおにわらうの依顔色さか

松蔭よこつくあるひの影のほつり

心戒又似よりと形影因兩のあつり

咽をかきり水籠をきり目て碩葉の

腹あつれりるをばけりぬ

其引

念に見とすひつの下を天のり

景帝

雪灯の束あつし戸郭に其尾
 二の膳乃それを心やほろり炭 其商
 寝所へ折松えりや雪の梅 檀泉
 口切し一堺の産そまつしと 翁
 口切やとらまりひびくは線蘿蔔 晋子
 貴賓を向はるゆへに所約束
 三きの鳴りとらや其鳴り世上り
 くれぬふ 韓退之いかに
 鳴をきりて
 炉用や油をよりかき金りるり 晋子
 既中まてし少くははる手は挟みたる高懸

松の塵

夕月廿二日上りもの墓も向ふてかへるは
 子しきごの故をこころい糸岳ちのりは
 のそりれらるる名なきかへての折り盆
 ありとありかより子葉春帆竹平
 仲海のありりありありありありあり
 てもつれは心はまうれを花あとりてと
 かりつと墓所を多指をゆるすに草のふ
 かひうらうらうかすくあつとのももそれ
 んみんくぬと心もこあつとあつとを向草
 にちりてと魂聖霊をくしりて脱羅乃の
 らうと城忘れやいありの身は侍と

市とて山とてをあらはしとてはけしむるは
高才を志しむるは多かり或時吉川
維足は所をよほりてはてしなく
ありつゝもあつても定りたらず常
らとほりするもを悔て全く才のたけ
忘れやもあつてもやまひたるは
忽そあつて幸を得る人の純熟あり
非佛すも衆生縁をりてすと恨を
のこしおをけ今もあつてもは
られつゝしとて此より世も張る
日本橋をりつゝりつゝ徳軍の人
たれとむつゝけもるをえはり

あつてこのをのこしとてはけしむるは
高才を志しむるは多かり或時吉川
維足は所をよほりてはてしなく
ありつゝもあつても定りたらず常
らとほりするもを悔て全く才のたけ
忘れやもあつてもやまひたるは
忽そあつて幸を得る人の純熟あり
非佛すも衆生縁をりてすと恨を
のこしおをけ今もあつてもは
られつゝしとて此より世も張る
日本橋をりつゝりつゝ徳軍の人
たれとむつゝけもるをえはり

いろはちりぬや家と山の猿 正春

けあやのそこのう筒も似す口惜子姿
けりも風変の新古ハワッレやや流踏ハ
工はく一白一駄のものこそ

元日や祖おませざる祖乃面 翁

七猿の仲るる踊師走る冠里

意の雫心乃猿ともみらじり子事也

母猿を階子りてや岩の如 大町

力の代を祖あもくく揚乃 一雀

百灯は猿もぬくくあは外 竹意

くくくやけ心や殿の猿 午寂

元々や夫婦の甲み猿乃膝 百里

ありぬれも其冬をりら

物善とてはけのすひくは暑外 朝豊

あむく猿のあやあるはあさうな 序令

借寒しとりぬ

木食乃江湖とあり木架猿 寸楚

朝子三盃暮子四盃とけりや 夜分

其数を破りて心のあはくする猿ある

郊外は踊り橋上をりら猿町の星を

める庚申塚子休きてあ腸のゆきちの

くくく其の五

桐干や柳乃油をつくは猿 晋子

猿飛や祖をいはい原を

猿の寄る洞窟をいひて 梅舟

うきや見猿のいぬまのいけ

膳を塩はけや雪乃猿

哀猿の声はくめてぬぐり昔四谷宿

次は猿人の市をもて楮りのち、鈴羊乳

裕免のいさをとりはらして商へる中

猿を塩漬りていづるもく引上るその

はや魚鳥をあつくるやうし李徳逢う申

陽洞子入て都をうむむけ猿ともを殺し

きり物治る繕うともふは侍りしかく

あやうき形師いふたさりさり羊

をもて牛よかんとこのまゝもりもはるま

歌の心并恋の丸

親世小縁よりしていつのも文字をむす

盲人あつととやかり字形を心練りて目

月山川雨風神木あつよこの点画あつ

るあつ布ハ紗るハ鳥るハ馬とてあつ

茶顔のむすをさつあつその物とてあ

つとてあつあつ目あつあつ人の書畫

のをあつあつあつあつと大帥あつ

乃山を切りしせあつと堂塔院とを建

あつあつあつあつあつ文字をあつす

合はつあつあつあつあつあつあつ

早八字を教へあつあつあつあつあつ

りもあがりり事そのお八の字負を案作
 に八卦六合よりりり三才の形容けりな
 文字よもりしるべき 盲人のうらちを
 むすわともしも 鴉鵲の黒白をくすく
 梅子雪雲のうらみあるを 一心の寄附
 する口おりのを白なりとまじしをよまに
 書す此跡けをあめりなりなりあり
 ああよえやとの福いふうりてあがりとの
 教へあひりん我國の風俗を習ひはるむ
 おする文字の心もをあつらあけぬ
 といふより 一 郡番近いつを音と名付
 小海編集小村出春よとを案をりすせ

勺の首中切分て付習たせゆりしもとを
 二昔れりりりり近來の冠付ハ教う先
 磨美の盡よりりも起りてちり本心城
 くらんせ放財ものみりり 紙江はめハ
 觴をうりぬ 又はハ汚濁の腐才下流
 舟のつむほとの花をり 椀家を絹布
 夜暑ふとんのくくい源げをのくりの箱
 入春 呼おつあくの後あすて入り知
 けちるものを書何し 一番二枚と
 十番あてそれくの自主ハ肥分りり
 福りの水をのちをそのそとらるり心
 ねて十才の男女下見小僧あて 他あつけ

まゝいあつた物をとらぬやうに下をこ
れ、志るに力なきぬほふれれば悪者よ
その志れることありける端に町に多
ありきなり者板をうけあふく夜は灯と
に都集より風雅の純狸なれを疎
のりて産業とありけり和光同塵のこと
より魔佛一如のをゆりしゆりし
古代に思ひ志のそとけりもあま今川の
了俊 源貞世いつく遊ありての記也

鞆の浦つゞく海邊は三島の山とあり
阿豆んりけ所を領しける人、和島の
乃すすける心ありきありはあり

田子りりある地土まてはも島のをよ
く興しけるよりやとけ所を二井の
署とらしよ島の守のこあひは島の
り小里一村はさしあるの相思ふとて
名のりりしはりんとはありけり
まをともしりいなるありしに
りゆりしとありこのありき

長者よりりりあるをいしありけり
島の島島の島の名をいしありけり
人なりしとありしとありしとありし
中つらやいりしに邪慾の名をいし
神仏の所志ありしをいしありけり

彼天物ともの飛びするやうをえ侍るや
いつくの板の上又まむともしつれす
蝙蝠乃むるアリも必しもめちうつとこの
中乃大園羽を以て座しつら首領とや
最上源三と一二の寮を何とてふ者こ
をのら住山く雪をれた十月の比より
所ををるう二月の子孫あては民家より
や一いつと人間の胸裏を乱漫一正法観
念の席を坊け一万三千の句形を招ぶ
いとも白をうり花のうらぬをあらじと
かのにちんせんと

星居の毎

やふいつをきあをのものとてや上下の人乃
心そらりよ成てうらひ盆存の悦ひを侍
むくしり或古宗匠の判読よ

やふ入 拙物よ二句去 養文入人倫こ
八の字ハ字去と何れなりこれハ文字の
上を信用し其理くしつらハ家の
奴婢童僕下見等すて幸よ一度乃聴
をもおるすは家風は例つてうらひ
あみはとも侍るし宗盛つのおやし所
いともをみりぬを本とすけしとの
けり人の系での擬も改めて春と秋

戸ありりや漢字うけて芝の海 琴風
小町アそあのやありりの肘袋 反梅
あありりよ松の骨やありりろ 昌貞
やありりや今の所主ハ百官名 山峰
あ敷入やまのふ見ゆるまの岬 日秀
やありりろあろく世聞名東戸 午寂
や敷入の唇はけし魚の店 百里
あ梅やあはあの名も四阿と 格枝
やありりや入おの持の考とこよ 大町
あ御飯る海山よりあちねるを一日
一糸は演説のあは松をたてしを
あありりやあはあを思ひを涅槃 徑者吟

やあいにあは梅さりりあめつを町 白梅
ああや五葉男乃よりあつ 立宿
あああ又里へ下をや杖と足 百猿
あありりやあの裕を朱買臣 毎雨
あありりや梅あるまの西の意 宇向
川幕やあありりある天川 雪子
あ入りりやあありりあを句 一たり 百之

千夜を一夜

あ新のあやつれて二夜を梅の宿 同
ああ子のあはあり日あや二日際 明言
あありりやあ園うりりをまめ連 朴芝
あありりよあをつけりあのみ山 雪花

やみりりの郵状はらす装うる 疎雲
舊城の片山仁兵衛里居の南入松
庭ふいせやあつと乃心家極利堤亭
辰之卯う猫ハ焦尾琴のちくく
躍と沢之悪う罟子ハ菊亭の
紫は白して二条のやのいさを

かきしほしらあまのち
尾寺やそらあきを赤瓦の垣るより毎雨
はあしあき光院の徳も入 立翁
秋色はあしーかきらん雨夜か 其雲
は白ハ秋の雨夜もやとやんれを
雨のあきくしあつれくともや

や不りりらあやじハあれ車引 九月
星合を中ハ乃七日の星あうあ 功悠
やみりりの狭箱よりあはれハ 野狂
らうらうをよハ敷入とらういて破字のあまも
あくは月りりりのくのであきくるまよ思ひは
けせえ一ツハあらうらや筆あやと白柳
恋の心ほりりーよあはじさうとしかりえ
と三日のひまをやらやーそれとも星乃名あ
あてあうあ一日の虚病をかああもとあし
あしあ心のくもあしとまらた偽ととをいせ
増うらとあゆらーもありけあ
やみりりやそれハ因幡乃是ハ星 晋子

陽はあつるころの地をうくめり丸は
尿やる声なきおむしけ成はあのをさる
いそく啼き志をりて歩を出んとする
げ一子をうくしけり足すのふ十ありと
りいついおあしそ是をうりばこいぬとらふ
けよ薬師寺堂の石壇をりこらあふ心
悲やあふこころみり目りふいあしりなと
りよこころ急あるにうらたのこ縮荷乃
社なるみりうきよとりのき立てるまをち
所は此の水田さぐりて袖ひちこれと井の
所心多げりしんおんあしりあふりこ新
そわはるましりあこしり

あつちの縮荷乃のこころは 貞祐

井上河列公の所りは

こころをたててを歩めと思ふま
我力あつちの老をまひり
そらのあつちめてこころはあやうけりは比に
こころのこころ縮めれをこころのこころを
あつちのこころ千里の遠八百目みるま
せんをそあつちのこころはあつちのこころを
きり社匹の相むねをうらうらとあつち
目あつちのこころはあつちのこころはあつち
かこころはあつちのこころはあつちのこころ
と鳥は藤の餅を小串はしては妖艶

あれをこのよきまはらばらばら
のぶらりもれをかいやりすつ心のまへに
あせとこころをみよるらひひかけあふの
水をのらりもやゆ一家をきてあふ
所二町よこらひもももらるるあふ
穂母うはらりもあふてすしあひく百里
のめ程又海山をうけぬはらりの心を
氣帯らいつと帰てくるハ轡上のまふや
かどあつのもららららや老幼のらひひを
まふすらひらるの立居も真妙なりす

困居の子を松風もあふる 晋子
まゝあおてぬて縁子乃月 冠里

あーい文いよ心持より麻糸つくり
あもれをわくわくあふありらおんか乃
すし たあふしと九煩惱の子つなまら
かしと田舎世界の忍びすらあふのまの
あふまあてても宝とめとより無牛長
猿のなまけ夜のあふ梁乃つてもあふ
雉乃ひなあてともつともこの床をこをいぬ
あふそ人とあふのれぬあふらあふ
あふを糸わらあふあふあふ足袋も
あふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふ

よりのつ人生の化育を志せり月と日と
るやあり天地ハ逆旅やといつる詞もすりり
くさきののちららるるを見はく解と
二ツ子のたゆ艸をいつとぬ様もあへる時
とさうね又何あけん 幸うらなくあり

二ツ子をりりろく引や大園科 大町
廣蓋ハ車大池やあり難 適山
花さうり葉を虫はく老菜子 其腫
乳のこも子さ味を付てや十三夜 沾例
子乃尿ヤ柳 カ子さうらいうほ 掃尾
初を心もさうら肩くらるる素華

あゝとらう子を思りつや都の妻 舟野 母

ゆい梅小さを木芽やうるお發 明言
風中の尾やえのころろく春の場 同滴
柿あうりあそふ子を蟹と猿 白雪
物盡はれる子りつこく乃昏 紫取
初年や何りの乳母ハ夕日長 沾海
秘苑子や醫師よしをせて紙書 百猿
桐火桶子柞葉さう万葉のそよみはこれく
あことあるまうといふふ

日くれりりやうらなをん子ねく
その子あたまをわれをまつ
子と飽うとアはくみい花を海 翁

迷ひ子や一膳ひしてはくくむ亭令
折とてもむの向りせうれの菊 晋子
孫ともの蚕や一糸小日向り菊 同
袴装や子ハ決意ても三節音楽音流

楓子うらりあの子子戦祝一
蟹屎よりつりよ花のいもころあ 晋子

ちりり知り日

百舌鳴の赤子乃頬を吸とくくり 同
産衣よ衣の目もあははあ紫うる 倫女

三為か祝い侍りて

烏龜の合墨も沙富のつつか治別

Handwritten notes in smaller characters, possibly bleed-through or additional commentary.

ふさやこまりの席 *侍りて*
かまのあしりのあせめしんをうりむいれと
こつりて身物とあせしあををすて
こそこのいさこよりあてきと子境あを
ある人あつれうらひころる扇座とある
とあけを忘るけて一ツの墨年蓋張
まろりの破懐巾やうれ色のを添て
は正驢の人こま向きをこれとあうまよ
あしとあ向の真のあありあんとは箱乃
中の貝あれた二見のうらあてまああ
うりし新都をうらあてまあああああ
名物京よりハ見なれあてまああああ

あつらひもつゝたのりすいぢ水鳥の
そめあつち

花と見て工のあつちあやみやことり

孟開眼の存亭主あれをいそい仕りぬ

宮古名をえ尉との扇うす扇屋

京大板花あのみをば慥面子のつとて

日夜筆をいける人て一盃ハハちらん

之盃一与五盃一与と老名男女着到は付

ふんしゆれたあつち酒徳の頌をを死

るいふあつち玉をれのいふちりて

此序をもつちゆりて

元禄水馬の年都鳥あつちまはれる洞

晋子

こつち小判ありぬすめを首ぐま
控れたあつちをちりて

佛ちりくれば善人とあつちを

書物をきく人は知者とあつち

かみの外は三斗入満原ちのうら口を

とこのて目花をもてあつちをて城下

こそよのけ身ごまをよつちのちのちあつち

こつち男の秘蔵はつちをのちをちりて

切込とつちあつちの其角みちりてやう

半盞をうらんげちりて

炭うらひ炭了を斗れ熱る

は主治たあつち雪子の作は木

切くべて高の徳を以て清く

着到の可し志とげあすすよ略く

け比袖のうらとら小蓋の蓋をを物に

しりひつあらん様おるや其貝いおる

ふあとりねと保んあつら貝よりを

下あーくそ被よりあつらあつら

白あくを貝の貝みせん袖のうら

賢賢ッくくくくくこの

口紅粉や世をうはのちの字様 末示

浦阿そい

元禄十五年八月十六日のあすなをすお

船好く人子あをたれ梅景寺のもかちよ

心をあてて品川のいそこりせーるあ

おあううなぬうら蛸阿そりるりさる

うらちるみてうらちるしく昔也の徳の

かー立るもあほをぬまはるけは

小舟のちうら雀ひよらわうてハんちあり

了あこちらさくをたぬるうらみれえ

萩のくふあをさくし蕪こりあひあり

こらーとらあらん松ぬをさ大公うああ

あそれしや冠墨公の所りかこりああ

益なり一石の蛤ニウいの貝干氣貝のうき
きるこれい控ていりあも砂あき大蛤
をきりせ松笠あつとありあめきしと
きるゆの音をあつと松尾堀とよ
酔きりりんまて

續こり一粟

魚の貝ありてあはれ新酒くち

音子

けりあて加既も一盃せよとらあは新の
一字く鼻をちりれし心せよりとあは
とりあす押くまらあ酔言しと
上代のはりり貝をきて賞瓶せと
新朝とのし所演あよ土肥の實平く

もてはあて舞するも亦横山の聲引あよ
太郎螺次有操とてある貝のあは伊豆
相摸の領をいへと盃つハかすせりや
りや今もりけあの回ひとも御侍の家
入る紙の料をいへるあよとつての早縮
作り申酌あんとより流すよ貝の腹は分
まんとて心よくあし礼貝いへるあ
盃ああるありのあよと酒ああて
あはあよのこは酒惜もあれと蒼れ余
ひりるあよと生前の指を天目とて
りあけあはらと心あや

蛤もろすみよりや酒惜も朝豊

海すほの小貝ひろくんと

種の鴉子舟のりむり法花さよ

あうりて海のす

浪のちや小貝よすゝる萩の露

みるこひや未つむむよ貝合一雀

黒海苔ハ花くおろくや帆立貝谷羊

ほの貝の筒をを屏くあつこ小舟仰

寄蠟乃お寄はくそとつめ貝堤亭

所々菊や小春乃海浦物青流

蛸を桜や月のりりりま百里

しりり貝のれりりま百里

串貝子所々の風のそつりり其る

赤貝の新山守やおほる月 功徳

今切乃片若く氷る蛇るな 里東

坂や小進を乃く大屋妻 曉白

始乃妻を丁児は産まかり 掃尾

何守の取の月ますは板屋貝 已卿

を舟具の上養いけを黒小袖 大町

初うた乃後子筆さ尻尾あな 貞佐

日本紀のゆへあり

歎とるま珠もあん汐子鳥 谷羊

遷宮ありまんとてみのおまをるま

船のりりりりりりりりりりりり

蛤乃のりりりりりりりりりりりり

貝十五

骨子

財つ偽や自例乃末の流き松
 仍委や猪口を引きたり忘れ具
 海雲のや浪のけしきあつての
 うけりや小塚乃身も吹んす
 すれ具音のきほみし人あ
 沙千あると名も多て糸れはあ貝
 元日真珠袋あてくらくんあり
 句をるやあると其自出身の音あり
 夜光松栴のつるまや貝乃玉
 石ひとつ清き渚やむすい蜆
 くれうとすくハ雀うく貝

文月をくめて刺繍を揃領し
 世のくは程ひらりとすとす

鯖

切りくても魚なり大赦やて
 けしハ性柔弱なりともは潮を
 ちあれて忽ち死に鱈俗字を
 よとせしや訓はあつとみり

小いしや一口茄子散乃門

白菅の宿る竹うふ中籐くや
 うらををそれる大小のその中と
 ちくくちくちくし商人の減は
 その中籐とるものあつて

世中を去るはくし小籐うり

歳の音

那 荷 小 中 間 殿 よ う く れ せ り 骨 子
うらむの廣きて

十六夜や海老を炙るの宵の園 翁

総長くあまのけしは寝る暑き小野徑

伊茶壺て白川とても饒るふ檀泉

小舟老ゆるそや小春のあはれ文潘川

海老糠や志こりふ切てき笑ひ 其已

小舟糠るを扱ひせうき世に 入松

山いづろ七目後よりそよそよ 来示

布施いじし基の穂のちろいふ 同

西陣や二月中旬丹良 那 自悦

拾 拾 朝乃背切や一極の前 景帝

苦切小朝色浮る下船乃海大町

初雪や鯨飾の優り風りる松松風

物の河魚扱箱よりあつりりり 来示

舟乃孫の文策もそよよやお紫 松雅

しんしんまきまきの光や金ぬみ里 莚月

本目の委を忘のるや尺の幾度 雪花

加が蓑は袴はるせりる山松乃 和重

初靴や醫師のちよりあひ物 其燈

切んてく小行力くやくま馬小 桐花

海前冬ハ咽通るるの日子六哉 止水

あけぬき力いしくしきの海嵐が 灯糸

所思

蛸を釣赤種のうろこ人跡まじ朝あ石いし鯨くじらやあ伏ふし千せん馬ば琴こ魚うし

漁家いしや遊あそつるあ時とき十じ旬じゆん

就すなはちちもも藤ふじ魚うしをを鵜うんん沙さ干かん香かう音おん子し

小こ舟ふねのの名なハハ昔むかしもも泊とまり留どまり也なり

夕ゆふ汐しほやや客きやくのの百ひゃくああ小こ舟ふね也なり

蓮れん花はなのの赤あか袴はかまもも花はなののああつつささかか

ほほろろくくとと船ふね飯いひ白しろのの根ね釣つりり船ふね

舟ふねちちははははとと是こゝををううめめするする鱧あじ也なり

足あし袋ふくろ賣うりりいいふふををわわかかれれとと学まなびび

馬うま船ふねととつつるるををやや競あそぶぶ組ぐみ

西にしををあありりののをを甘あまいい河が豚とん

松まつ魚うし本ほん字じとと以もつてて堅かた魚うし 延の表へ亦また

いいろろくく文ぶん史しのの賞しょう額がくとと貴き人にんのの上じやう珍しんとと成なり

之これのの牡丹ぼたんのの紅こうととのの切き目めをを正ただしし社しゃ務むのの

涙なみだとと錦にしんををあありりととししつつるるととししつつるるととししつつるる

小こ舟ふねはは物ものありりとと松まつ江えのの浦うらのの福ふくをを二にはは

住すま居いのの所ところ亦またをを潤うるのの存ぞん後ごはは比ひりりのの時ときをを得え

てて養やしやうあるるもののをを初はつにに字じをを一いち物ものをを争あひひ

夜よのの字じはは百ひゃく金ごんををかかららんんととててああららぬぬとといいふふ

のの指さし上ありりととすすもも何なにれれああららぬぬとといいふふ一いち片ぺのの尾び

帆ふををののももんんててああままりりをを待まちてて公こう門もんへへ入いるる

鬼おにのの首くびととるる心こゝろ地ぢとといいふふ南なん渡ぶ東とう海かいのの魚うし籠かご

一番鱧と名のりせ其膚を犯せらるゝのそり
渦輪横濱古津小祿の二届目鹿と云黒の
兵ども駿豆相出の浦くま魚陣をあら
録今節襦袢隙袂紫魚俵切出付の族
一味同心り中あて雉子焼あつ煮じり
煮のそをてつとといへも昔ハ右約のみ
まてをやめと書れ其臺のく人の熱上を
ゆるされす一子石燭法ものよりそを
けりく浦高のそり梅あつを根中打小
徹くはつとせまり血合ふくまわや
躍くらふをえんていさめていそく何脈ハ
西施乳と比せくふ其意味を忘れて性

つ目怒りり世人皆酔のまふを切らる
るふあつれと盃をとりて

かあつろハ法てむらんとの望魚 翁

望魚うりひりゆ人を酔すらん 同

日白人をひきおこし其いけるよ

揚貴妃の夜あいきりる松魚が角

夜くれせぬむり国へと望る急や 青流

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

白兔公

冠里公の御園より白子^カを畜しやふり
中子毒兔をあつて子を生けり
これらの月をむりしてをのまきり
のるそのこはれをてといふか
青州一葉芥のあをりてあふれ
をこまらうより外て枯葉の
味を其くち白蓮のつらある
こころはせせこし大さ
て所側へめげるお樊申を
心より人におされて飛す
こころはせせこし大さ
て所側へめげるお樊申を
心より人におされて飛す

硯の中へ足を入るとどぶ
白玉を墨にこし
はれしるこやうこあ
こころはせせこし大さ
て所側へめげるお樊申を
心より人におされて飛す
こころはせせこし大さ
て所側へめげるお樊申を
心より人におされて飛す

五

同

名柄の文を乃記

貞享中五ノ月五日河村瑞軒と云ふもの
おぼやげの傳せて了りて難波古江乃
増持よりを堪へて船旅の自由ありしめよと
の惠みあまたしき所ありしに付て都鄙
萬葉のものとも膏沢乃歩みしを
あいにあつたるにをんまゝを
して関所はしるる川筋とをわたりされ
ぬの名橋乃ありと今ハワリて成てそ乃
封境をまゝ敷くまれありとふりしを
あつたるを物名ありと云ふも
とらふりしと云ふ其古杭ありと云ふ

とておぼつちきを世の幸を得たり
奈裏向てもとらふりし人の力も但世
この地を木を堪へてあり性古橋あり
りしとありてよにまゝに板目をり
けきとありしにありしにありしにありし
名物といふありしにありしにありしにありし
と云ふ世にありしにありしにありしにありし
のくおありしにありしにありしにありし
りば人麻呂の神も具たはるは赤人の
神を一座の向所をありしにありしにありし
神よりありしにありしにありしにありし
當時の人をりしにありしにありしにありし

ひらひらいふる向ふにその川舟をいしける
閑暇をおもはれりつりて昔よにたをの
ついで引連なる牛のつめよそよふハ
隙の山家よと申りける事とさうやうに
何とものこゝろをこれと祇法師のと吟せし
古意をらうやとすまゝにぬ侍藤よ友を
去のて飯よハ石をのこして茶よ茶葉を
を吐出しと一飯ゆゑに後よは山里の侘
寂赤めて閑寂の日月を異しぬ茶葉を
ふもよはれおそくこゝろをせりし隙と
あつしそ女院の侍士のり今も俗を
おらけし柴うるまも背むらひてあ

らくをりあはれゆとてをんゆめし
さよりのや牛合点し大原まで晋
一とらるゝ給よおろやくら木賣
とりく木やおなめてこゝ鹿の尻
炭よりやおほりの後水鼻をへん
荒神口よし一とらみとよむ色おけり
げりし中みも新也よくとよむをうて
名のれりてられし
はりとよみおひも雪のくらあうが
雪山のほ乃葉をけしとらん力のほしめも
入相のつゆりあとおとらんれきり
水戸黄門の煮山庄よ黒木茶屋じりしあり

酒旗夕陽あひるうらと木葉くくはるを
かたはらば捨てしきらく界のひそきを窺
りよはあやちりせけしきのと風騒のり
ををのりよもてりりり

繪の中み居るや山家の雪にまき 去来

をこもり温飽ありてはひひひきまはち
をへやひき大原木のありしもては入
りの月ふ影けりむて醒てあやめる灯
のゆらに大原木をうらひてやせぬ

後附

かもあらば雪を鉄輪に雪をふ 晋子
うす言や大の字わくく山り

うらめいさき

方四寸の円形ありて其まは葉木あり
梅檀の木膚よりもおとすやふ蹄の
うらめいさき中らあし厚五分かり

夕影や 一白乃これ ふの宿 晋子

折は梓の政か少長り宅著法の時ま大工
との一鋸子とこの切りくせりのある
を推車やと拾ひよりて一白を蔭繪は
茶瓶の柱よりけて日この旁を忘れんとは
おれと休の一字子心あるまを困をたせり
つくく角落り勞をうらふ一日の休をた

百骸をあらけて黒飯を押しひくひく
ゆきの新盤中ノ喰粒ノ辛苦の吟を塵
ころも京大坂の産より千金を積みか長
を海にひくといふもこれ通心はゆきを
れえと自ら押さるの月みかこつて言を
其旁方寸の胸中みあれをぬた坂田
山下りころも老ころも多門前暮るる名をり
ゆきころもみも力をやほろもんるを能く
そのく錦躰み汗しころも裸なる場ハ
白前より同一六祖のひとり後流のまより
再来し推車は杵をゆつるその角を
杵のえ

心水神

金のあふふは牡丹糸子のこりま入る菊乃
句とハあのつとあるふくころもかまひさりま
まねのえはよりほの句をらんよそのは
くらつたらぬのものちうくやもあまは
ころもしあまらんよと優みうころもころも
あすやあるをたりしころもむきころも
まのいん後集見童子腕の小口切とし
ものちうあころもころも何ちうはるれを
ひころもあころもあころもその杵の柄ハ
いつち杵んとあつたころも入

心水

大なる文新あつた杵の海は
推切て杵よりやく涼ころも推車

夕うほやあつたに灯さそ肩口 秋航
中うほや山伏んれを暑くらも
夕負や片広小咲とそこけう青 昌貴
蟻脚の夕影くまて我をうと 幸論
夕負や苦う宿のあつらも 大町
夕影や氷室を交へ火あつら 一産
夕影や不破の関をわらう 文筆
夕負や竹馬う海推のう 活例
中うほや昔踊や上つら 竹宮
祖師の自昼賛
ひるうほく米つ子凍むあつら 翁
昼寝や穴のいをれを居酒吞青嶺

あろふ傘

別溪の雪り 御乳山は雨あは御
心あつけれを素なう子ねりし雨の楽
とせうを国中の力とせう 雨あつら
胸いりし其吟と
暁の及吐るとなりうちとまに
夜とてまけ様多うた鼓 郭
ほとてまけ 傘を買せうり
傘うりの愛とつらあるものう月夜乃
魚うり本陣 つら心地より物の哀れも
こゝみあつらふらかりある其裔う雨所の
額子暁笠の二字をほりけつらなるるも

色がすくなくも示る筆を確しせしる物
傘うぶ時と名つけし西鶴の口拍子を
かゝり朝湖の虚舟よりもかゝる子さすとも
かる中ふ。孝ある人の子。杵の親乃年形
すおほく又文治つづくあひすあることまじし
お判し金の一。一目娘の。一目えやらの
年月の。おと表しも。かおれて来る猫
九月みさう十月つゆしらの比客前も持、
お料理場の下より。おきすす。こゝこゝ
二階へあがる音は。あててわす。とならぬ灯の
かけみ箸削る。こゝに志いあて。お痛く
あやめと。お守りれを。急し。きるる。あんか

見せ男が。おほく。に。あいらい。し。惜く。表し
風の。あつ。籠推を。待てり。お夜堂の。未拈
角前。髪は。似る。月。お心。おそ。げ。おある
客の。お移つ。い。る。し。る。各も。くれす
荒。し。る。家。乃。分散。と。い。え。て。庇。ま。り。し。け
天水。も。か。た。く。手。破。れ。め。の。障子。の。口。不。く
あ。て。い。と。あ。う。う。あ。ぬ。后。の。吹。あ。て。し。は
これ。あ。い。つ。も。あ。る。か。い。る。う。鎌。倉。の。身。に。お
つ。ま。く。冷。飯。と。い。ふ。名。も。う。身。世。子。侍。の。り
ける。お。思。い。つ。け。い。る。こと。や
お當の。月。お。く。お。し。ら。み。み。ま
いつ。こ。あ。う。ん。あ。う。ご。や。と。お。あ。う。し。ま。お

一好すめありけんと書て来示子送り作り
とある小橋子耻といへん

子も少あはれ枕もあまは 郭云 角

子親人を馳走りぬぬをり菊
女郎屋客屋といふところの假りも無常と

親すへうはといふうへ子寐るうへ

所へははるる有るは 瓶おち

昔口あ中の所ありはとまは 大所

ゆるくはるるをよふをけうか 其帳

あはれおのめをばらばら
あはれおのめをばらばら
あはれおのめをばらばら

寐てらんるはるる

浴の涼及い宵馬成しておあふのを
志しれあういしてさうんを忘すこれ
を忘れしものことり貞亨の比

天脈を診まをるるをめをかりり

けるは其時暮子うちほれてあう

さりし罪めて山科は追放されり

しかと明醫府をあうる者あは

をやうを都まかへ入れてるは名

いあはれ日比下樹を百貫よて茶

碗を求あ抄子とよぶめり、まの所
北野よりのかへるるに涼及う家り

方寸のや山月の影を映する一所
とありふつゝ知音の心弦

花の帯けつるも昔の竹者テ涼及

八重山は小亭くも無人 其角

勝月精進の家やすらうして湖春

崩を頼もきれも耳くる 及

裸力は大口をさし乃ち花角

樗乃をさし暑くある 春

とありふつゝ知音の心弦

~~~~~

政元乃祥吟

三月正當三十日 津城王於々

革命改歴の歩ありし中あると出仕

各年此上刻

室永乃給とくかこれ米の霜 冠里

寶祚惟永輝光日新ナ杜子羨句 是以熟

字を以てし山呼万歳をとりてせあつて

とあり此日八十八夜子ありまれば星と

表とくむすりそものさあそや一被を

かほけあく世の民くあみおわひ是らめ

日新四方あり尚自由ありあやせん

竹さきありあやせん尚尚節なれ三月盡

の影おゆ所なり終元の詔本朝文粹
慶の保胤の事ありしとく唐堯乃馭民
いすの事ありしは漢武の撫俗とて
建元の号ありしより乃例休祥災變
ありしを用元草曆の事ありしを引天元
六年を改めて永觀元年の大赦とて下
徳政の化育ふかじゆと云

今案ニ茲經嗣々山行草記ニ文武天皇
より年号なるとも定まりしよりその事
存ハ醍醐の御門下を三十三年すこ
位子ありしりはあまを格すなるとい
ふ事をも定むれり也 祇子聖徳乃
りよりハ延喜のひより一も應永の事

同くはと書せぬと山殿ハ鹿苑院
准三公義滿公は永永ハ應永十五年

三月八日也

本年の冬震火瀧亡世界国王のころを
西の海くはるもと流し多ありし海のほし
甲申の知月初日れ日ありしは洛に新
夜かつて人々の心のあつてなりし日新
なりといふ句は心くをいふは是の句あり
は新なるをいふけて天下泰平なり
奉幣の使はつてつるを新はる

をいふ氣て伊勢とてなり夜更晋子

